

資料 9 - 2

平成 15 年度内分泌攪乱化学物質に関する野生生物蓄積状況調査について

1 調査概要

外因性内分泌攪乱化学物質（いわゆる環境ホルモン）による環境汚染は、科学的に未解明な点が多く残されているものの、それが生物生存の基本的条件に関わるものであり、世代を越えた深刻な影響をもたらすおそれのあることから、環境保全上の重要課題である。

本調査は、野生生物における内分泌攪乱化学物質の体内蓄積量をモニタリングすることを目的として、昨年度に引き続き、野生生物体内の化学物質蓄積量調査を実施するとともに、参考としてバイオマーカー調査等も合わせて実施した。

2 調査方法

(1) 調査対象生物種

沿岸から陸上にかけての各種環境に生息する種で、モニタリングのために、安定して試料採取できることなどを考慮し、下記の種を選定した。

カワウ（関東の個体）	10羽	試料：筋肉（有機スズ類は肝臓）
カワウ（琵琶湖の個体）	10羽	試料：筋肉（有機スズ類は肝臓）
ハシブトガラス（東京都の個体）	10羽	試料：筋肉（有機スズ類は肝臓）
スナメリ（座礁個体）	10頭	試料：脂肪（有機スズ類は肝臓）
ニホンザル（東京近郊の個体）	10頭	試料：筋肉（有機スズ類は肝臓）
タヌキ（東京都の個体）	10頭	試料：筋肉（有機スズ類は肝臓）

(参考) バイオマーカー調査等

カワウ（関東および琵琶湖の個体）	各 10羽	試料：血液、肝臓、甲状腺、生殖器、その他主要臓器
ハシブトガラス（東京都の個体）	10羽	試料：血液、肝臓、甲状腺、生殖器、その他主要臓器

(2) 調査項目

平成 14 年度調査項目にトキサフェンを加え、内分泌攪乱作用が疑われる化学物質 32 物質の体内蓄積量を分析測定した。ただし、採取試料の鮮度が悪いと予想されるスナメリについては、分解性の高いアルキルフェノール及びフタル酸類など 13 物質を除いた 19 物質を対象として分析測定を行った。

(参考) バイオマーカー調査等

- ・ 薬物代謝酵素活性（EROD、PROD、MROD、BROD の活性）
- ・ 血液中ホルモン濃度（性ホルモン、甲状腺ホルモン等）
- ・ 病理組織学的検査（生殖器、甲状腺等）

3 調査結果

平成 16 年 7 月 27 日現在、解析中。